



北・その自然と人

札幌市博物館活動センター情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

札幌市博物館活動センターは自然系総合博物館の計画推進のため、市民とともに教育普及活動、展示・交流、調査研究、資料収集保存を行う活動拠点です。

2013.12 No.55 発行・札幌市博物館活動センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ内5階

TEL 011-200-5002 FAX 011-200-5003 <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

手稲山のコケ

内田 暁友氏(斜里町立知床博物館学芸員)

大学での研究テーマとして手稲山のコケ植物相(タイ類)を調査した。なぜ、コケを研究対象にしたかということ、子供のころから小さい生物とレンズが好きだったのでルーペや顕微鏡を使う研究がしたかったのと、他の人が研究していない分野がおもしろそうだったからである。

まず、コケとはどんな植物なのかということ、コケは漢字で木毛とも書き、「人をこげにする」という表現で使う「虚仮」(仏教用語)ではない。この漢字からもわかるように、日常的には“木に生えている毛のようなもの”や“小さな植物”をなんでもコケと呼んでいる。生物学上、コケ植物(蘚苔類(せんたいい))はセン類、タイ類、ツノゴケ類に大きく分けられる(表)。近年のDNAによる解析では、進化上、タイ類、セン類、ツノゴケ類、その後にシダ植物、種子植物という順に進化してきたとされる。しかし、ツノゴケ類については不明確な点も多く、まだ学者の間で議論に決着がついていない。ツノゴケ類は北海道ではまずお目にかかれないが、道南やアポイ岳の高山帯に生育するものとされる。

このような背景をもつコケ植物を調べようとしたとき、私は「ある地域にどんな生き物が何種類生息しているのか調査することは自然誌研究の基本」と考えていたので、変化に富んだ多様な環境がある手稲山(特に平和の滝コース)を調査地を選んだ。しかも、手稲山は大学から近く、自転車で頻りに現地通えたので、平和の滝コース全ての沢筋を源流まで歩いて調査することができた。

調査の結果、北海道で初めての記録となるものが3種あった。これらは手稲山のふもとにどこにでも見られる。また、日本初記録の*Lophozia*属1種が見つかった。この種は岩に生え、強い香りがある。植物体の上部が雌器、下部が雄器となる特徴をもつが、非常に小さく肉眼ではまずわからない。この種は北半球に広く分布する種であり、今後も北海道の高山帯や岩場から見つかる可能性は高い。

さらに、調査結果をもとに、手稲山のタイ類相と道内の他地域と種数の比較をしたところ、手稲山は礼文島や利尻島との共通種が多かった。これは日本海側に偏って分布する傾向のある種があるため、その傾向が強く結果に表れたと考えている。今後、道内各地のデータがそろえば、さらに精密な分析結果が出せるだろう。

さて、私の研究から10年余がたったが、道内のコケ植物の情報は当時とあまり変わらない。北海道在住のコケの研究者が数人しかいないことも一因だろう。実際、コケ植物は見分けが難しく、他の植物と大きく異なる形態を持つため同定には特殊な知識とテクニックが要される。とはいえ、コケを鑑賞して楽しむなどの新しい趣味が広がっているようで、みなさんもぜひコケに目を向けていただければと思う。

表. 蘚苔類の種数

	セン類	タイ類	ツノゴケ類
世界	6,000	13,000	150
日本	600	1,000	20
北海道	200	500	3

それぞれの種数は諸説ある。主に「日本の野生植物 コケ」(平凡社、2001年)に準じた。かつては、現在のツノゴケ類はタイ類に含まれていた。

手稲山で発見!
日本初記録

Lophozia bicrenata

手稲山で発見!
道内初記録

コダマイチョウゴケ
ミヤマフタマタゴケ
イボクチキゴケ

(いずれも論文未発表)

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse(ギリシャ語)と通信や手紙を意味するLetter(英語)からMuseLetterと名付けました。



写真:星置緑地

“テイネイ”はどこに？

手稲という地名は、アイヌ語の「テイネイ=湿った所」を語源にしています。「湿った所」とはどこを指しているのでしょうか？

その謎に迫るには、まず手稲山から話を始める必要があります。手稲山から北東方向に広がる平地に向かって流れる川には「星置川」、「軽川」、「三樽別川」の3本があります。それぞれの川が手稲山を削りながら流れ、削った岩石を山のふもとに堆積させ、小さな扇状地=崖錐がいのすいを形成しました。自然の中では「小さな」規模ですが、そこを私たちが歩くと「なだらかな起伏」として感じられるほど大きなスケールです。このことは、国道5号を通過して、三本の川を越えるときに上り坂と下り坂を繰り返すことで体感できます。これら、3つの崖錐が重なり合って1つになったのが「星置(複合)扇状地」です。

一般に扇状地は水はけのよい砂礫されきから形成されますが、扇状地より下流には細かな砂泥さでいが堆積し、その上には湿地が形成されます。

星置扇状地は市内でもっとも海岸に近く、標高の低い土地に位置するため、地下水位が高く、湿地になりやすい土地でもあります。そのため、水はけがよく乾燥した扇状地の末端に接するように湿地がありました。それで、「湿った所」という意味の地名でよばれるようになったのではないのでしょうか。現在、扇状地と湿地が出会う場所として「星置緑地」が残され、湿地特有の植物であるミズバショウが雪解けの頃に咲き誇ります。(古沢)

※礫とは直径2～256mmの石の粒を意味します。

連載!

札幌っ子 大杉解説員の **じのスケッチブック**

Page7 最後の力を振り絞ったノコギリクワガタ

この夏に人生で初めてノコギリクワガタを飼育しました。もとはお客様が道端で弱っていた個体を保護し、「標本になれば」と当センターに届けたものでした。試しに水分とエサを与えると元気が回復したので、そのまま個人的に飼うことにしました。昆虫の専門家に相談すると、ノコギリクワガタの寿命は1年と聞かされました。

10月のある日、これまで1度も飛び立とうとしなかったクワガタが最後の力を振り絞るのように翅はねを広げるのを見て死期が近いのを察知しました。そして、広げた翅をもとにもどす力さえ失い翅を出したままの姿が、私が見た最後のクワガタの姿となりました。それまで、エサを食べなければ具合が悪いのかと心配したり、姿が見えないと脱走したのではないかと探したり(土の中に隠れていた)、弱ると腹にダニがつくと教えられ、まめに腹を見たり・・・ノコギリクワガタのおかげで毎日が楽しく、今、クワガタがない空っぽの虫かごを見るたび、冬が来たのだと思いきやせつなくなる秋の終りの出来事でした。(クワガタを保護した方、飼育方法など教えてくれた専門家の方、ありがとうございました。)

